

機関番号：12606
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520081
 研究課題名（和文） 日本画と材料—近代に見出された岩絵具と和紙
 研究課題名（英文）
 Japanese Painting and Materials: Iwa'enogu and Japanese Paper produced in modern times.

研究代表者
 荒井 経（ARAI KEI）
 東京芸術大学・大学院美術研究科・准教授
 研究者番号：61361739

研究成果の概要（和文）：

日本画を規定する材料となった近代の岩絵具と和紙の起源と普及を多角的な手法で調査し、岩絵具については明治30年代から40年代、和紙については大正後期から昭和初期に主な開発と普及があったことを明らかにした。また、1980年代以降の留学生によって中国に伝播した日本画技法を調査し、伝播の経緯と普及状況を把握した。

研究成果の概要（英文）：

Modern iwa'enogu [pigments] and Japanese paper define Japanese painting. Diversified research about them developed the facts that production and popularization of iwa'enogu date back from 1900s to 1910s and Japanese paper back from late Taisyo era to early Showa era. And also, researching the spread of technique of Japanese painting in China brought by students overseas from 1980s downward, I have a clear comprehension of the course of spreading and present situation about the technique of Japanese painting.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：保存修復日本画

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：日本画、技法材料、岩絵具、和紙、岩彩画

1. 研究開始当初の背景

過去に近代日本画についての技法材料学、技法材料史の研究はきわめて乏しく、体系づけられた研究はおこなわれてこなかった。日本画の技法材料は、近代に入ってから伝統的な日本絵画の技法材料から著しく変化して

きたにもかかわらず、数多く刊行されてきた日本画の技法書は、ほとんどが画家による入門書や手引書であって学問的な体裁をなすものではない。

本研究代表者は、近代日本画の技法材料史の萌芽的研究として、平成15年に博士論文

「狩野派の技法から近代日本画の技法へ」(東京芸術大学)を発表している。その後、平成17年度～平成18年度に科学研究費補助金萌芽研究「近代日本画材料の変遷と東アジアにおける位置」が採択され、現在普及している日本画材のほとんどが近代に開発されたものであることを明らかにした。また、そうした近代の材料による日本画が、近隣の韓国画や中国画と大きくかけ離れたものになっている現状を把握するに至った。

2. 研究の目的

「岩絵具」と「和紙」は、今日の日本画を規定する材料となっているが、研究代表者自身による先行研究によって、それらはいずれも近代に入ってから開発されたものであることを指摘している。本研究は、自国の伝統絵画というイメージをもつ日本画のアイデンティティーが如何にして創られていったかを、近代の材料の開発から解き明かすことを目的とした。特に先行研究で概要をつかんだ近代岩絵具の開発をできるだけ具体的に明らかにすること、土佐と越前における近代和紙開発の背景を洗い直すことに重点を置いた。

また、日本画と同じく国号を冠した韓国画や中国画という近隣の近代絵画はどのような近代化を遂げてきたのか。現地調査を踏まえ、日本画との差異を把握することにより、日本画の歩みと現状を相対化することを目指した。海外調査では特に、1980年代以降に来日して日本画を学んだ中国人留学生らが母国で創設した「岩彩画」に注目し、その現状と中国での受容状況を把握することに重点を置いた。

3. 研究の方法

近代の岩絵具開発については、東京と京都の老舗画材店、図書館、古書店から「商品目録」の収集を行い、岩絵具新商品の販売状況を調査した。さらに、明治10年から明治36年にかけて開催された内国勸業博覧会の出品録から画材の出品を抽出して補完した。また、現在の岩絵具メーカー国内1社、中国2社を訪問し、聞き取り調査を行った。

近代岩絵具の初期使用事例と普及の経緯を探るために、『日展史』を中心に展覧会評や画家の自伝等における画材関係の記述を抽出し、重要作品を絞り込んだ。現存する重要作品数点について、所蔵者の承諾を得て熟覧調査を行った。その際、伝統的に使用されてきた天然岩絵具の群青、緑青と近代に登場した人造岩絵具(新岩絵具)の群青、緑青の判別が問題となったが、研究代表者らが考案した赤外線撮影による両者の簡易な判別法によってより高いレベルでの調査が遂行できた。

また、従来、陶磁器の釉薬に由来すると言われてきた人造岩絵具の起源について、明治期の京都七宝における釉薬技術との関係に仮説を立て、並河靖之七宝記念館との共同研究を実施した。

近代の和紙開発については、高知県の町紙博物館等を訪問したが、主としてはこれまでに一定の成果をあげている先行研究の洗い出しと整理をおこなった。また、近代の和紙開発が集中的に行われた大正末期前後の技法書を調査し、日本画家の支持体への意識の変化を追った。

東アジアにおける国画の現況調査と、日本画材料の伝播状況の調査については、中国2回(関連研究を含めると3回)、台湾1回、韓国1回の渡航によって調査を実施した。特に、1980年代以降の日本留学生によって戦後日本画のメチエが伝播した中国の岩彩画(あるいは工筆重彩画)に関しては、かつての留学生や美術大学の訪問を通して、伝播の経緯と現状を集中的に調査した。

これらの調査結果から、日本画ならびに東アジアにおける近代国画のアイデンティティーを成り立たせるものとして、模写(古典絵画研究)が浮かび上がった。そのため、研究の次の段階への準備として、指定文化財と近代の模写事業に関する資料収集を開始した。

4. 研究成果

近代の岩絵具開発については、東京と京都の老舗画材店、図書館、古書店から収集した「商品目録」ならびに内国勸業博覧会の出品録から抽出した画材供給の変遷を調査し、およそ明治30年代に新商品の販売が行われ始めたものと推定した。収集できた目録の記載では、明治36年が初出。収集した目録は、『東京芸術大学美術学部紀要』第48号において活字化した。

さらに、展覧会評や画家の自伝等から絞り込んだ近代岩絵具の初期使用作品数点の熟覧調査を行い、近代岩絵具使用の事実と使用方法を確認した。中でも、明治44年の第五回文部省美術展覧会に出品された横山大観《山路》(永青文庫蔵)は、以後の日本画に岩絵具を流行させた作品として特に重要である。同作品の調査は、東京文化財研究所と永青文庫の共同研究に参加協力するかたちで現在も実施継続中であり、成果の一部を文化財保存修復学会第33回大会で発表した。

また、作品中に使用された近代岩絵具の調査においては、伝統的に使用されてきた天然岩絵具の群青、緑青と近代に登場した人造岩絵具(新岩絵具)の群青、緑青の判別が問題となるが、研究代表者らが考案した赤外線撮影による両者の簡易な判別法によってより高いレベルでの調査が遂行できるようになった。この調査法については、文化財保存修復

学会第 30 回記念大会で発表した。

また、日本画の人造岩絵具の起源は、これまで漠然と陶磁器の釉薬に由来すると言われてきたが、研究代表者は、明治期の京都七宝における釉薬技術との関係に仮説を立て、並河靖之七宝記念館との共同研究を実施した。これにより、具体的な七宝と日本画の関係を証明する資料は見出せなかったものの、七宝釉薬のフリットと人造岩絵具のフリットの製造工程が酷似していること、七宝釉薬の改良(色数の開発と発色の微調整)が日本画の人造岩絵具の開発より時期的に先行していること、そして、京都という地理的文化的条件から影響関係が十分に想定できることがわかった。

近代の和紙開発については、越前・岩野平三郎と土佐・中田鹿次の巨大和紙開発に集約されることが先行研究によって指摘されている。そのため、本研究では、これまでで一定の成果をあげている先行研究の洗い出しと整理をおこなった。基礎資料として重要な『岩野家書簡』と東京美術学校長等を務めた正木直彦の『十三松堂日記』のすり合わせを行うことによって、近代の巨大和紙開発の背景となった横山大観の関与、岩野と中田の競合などをより明らかにすることができた。また、近代の和紙開発が集中的に行われた大正末期前後の技法書を調査し、日本画家の支持体への意識の変化を追った。これらの成果は、本年秋に行われる展覧会の図録に論文として掲載を予定している。

日本画技法材料の中国への伝播状況と受容状況を現地調査した。中国では、1980 年代以降の日本留学生によって戦後日本画のメチエが伝播し、「岩彩画(あるいは工筆重彩画)」という新ジャンルが勃興しており、美術大学での教育を通して、日本留学を経ない岩彩画の第二世代が輩出している。この状況について、特に日本留学を経験した教授が多い広州美術学院を中心に訪問調査した。模写教育を常とする中国画(写意画・工筆画)教育と同様に、岩彩画の教育にも模写教育が導入されているが、模写対象として敦煌やキジルの壁画が選ばれていることがわかった。これは、中国の他地域の岩彩画教育においても共通している。このことにより、絵画のジャンル形成に模写が要件となるという示唆を得ることができた。

また、中国において 5 年に 1 回開催される官製公募展の「全国美術展覧会」国画部門を上海美術館で見学し、写意画に対して工筆画が隆盛している中国画の現状の一端を知ることができた。工筆画は、中国画の伝統絵画とされるジャンルであるが、色彩中心で自由度が高いため、岩彩画との融合やミクストメディアへの傾斜が容易である。これを憂慮する議論についても情報収集することができ

た。

韓国では、ソウルにある弘益大学と誠信女子大学の美術学部を訪問して韓国画の現状調査をおこない、韓国画が、かつて基盤としてきた水墨画から離れ、ミクストメディア(現代アート)にシフトしている状況を再確認することができた。現在の日本画にも、韓国画に共通する傾向があり、中国における工筆画や岩彩画の状況を含め、今後の近代国画の方向について考える重要な情報となった。

これらの調査結果から、日本画がジャンルのアイデンティティーとしてきた岩絵具や和紙といった材料が、近代に入ってから日本画というジャンルのために開発されたという経緯を具体的に明らかにすることができた。また、日本画の近代的なメチエが、文人水墨画を基盤として歩んできた隣国の近代国画においては異色なものであり、ミクストメディア(国画の外)とされるか、国画内の彩色画、工筆画に内包されつつも、その母体をミクストメディアに傾斜させるものとなっていることがわかった。

一方で、中国の岩彩画教育における壁画模写を知ったことは、近代国画の形成に古典絵画への典拠が不可欠であるという根本的な構造を知る上で大きな示唆となった。この構造は、明治期以来の近代日本画の形成にも共通したものと考えられるため、日本における文化財の指定と近代の模写事業、模写教育に関する資料収集を始めた。研究代表者は、日本画というジャンルの形成とアイデンティティーをについて、技法材料という視点から調査と考察を進めてきたが、本研究によって、今後、日本画と模写の関係を解き明かすことに課題を移すこととなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 荒井経、「資料「商品目録」近代日本画の材料(色材篇)」、『東京芸術大学美術学部紀要』、査読有、第 46 号、2010、pp.43-87
- ② 荒井経、染谷香理、杉本史子、「「えんぶた」の発見」、『画像解析センター通信』東京大学史料編纂所、査読有、第 50 号、2010、pp.8-12

[学会発表] (計 12 件)

- ① 荒井経、二宮修治、小川絢子、佐藤香子「赤外線撮影による天然岩絵具と新岩絵具の判別法」、文化財保存修復学会、第 30 回記念大会、2008
- ② 荒井経、「日本画の色彩と色材—色彩表現の近代化と色材の開発」、日本色彩学会関東支部、2008

- ③荒井経、招待講演「日本画の変遷と東洋画の次世代」、広州美術学院（中国）、2008
- ④荒井経、招待講演「日本画と材料 岩絵具というアイデンティティ」、筑波大学芸術学系、2009
- ⑤荒井経、招待講演「日本画材料論」、武蔵野美術大学、2009
- ⑥小谷野匡子、大川美香、福田誠、二宮修治、荒井経、小川絢子、佐藤香子、新免歳靖、「菱川師宣筆「江戸名所風俗絵巻」の技法・材料調査」、文化財保存修復学会、第31回大会、2009
- ⑦佐藤香子、小川絢子、荒井経、二宮修治、新免歳靖、武藤夕佳里、宇田川滋正、「並河靖之七宝記念館蔵 七宝釉薬の調査報告—明治期における京都七宝の技術」、文化財保存修復学会、第31回大会、2009
- ⑧武藤夕佳里、二宮修治、荒井経、宇田川滋正、新免歳靖、佐藤香子、小川絢子、「技芸（工芸）技術活用による産業創生—並河七宝と技術の背景」、産業技術史学会、2009
- ⑨荒井経、招待講演「画家の視点 プルシャンプルーによる連作を通して」、鶴見大学文化財学会、2010
- ⑩荒井経、「いま日中交流の必要性」、中国における「岩彩画」の登場と戦後日本画のメチエ第1回公開研究会、2010
- ⑪荒井経、「中日の岩彩画教育と東洋画の将来展望」、中国における「岩彩画」の登場と戦後日本画のメチエ第2回公開研究会、2010
- ⑫荒井経、平論一郎、小川絢子、「近代日本画の新材料—永青文庫蔵 横山大観<山路>の分析調査報告」、文化財保存修復学会、第33回大会、2011

〔図書〕（計2件）

- ①荒井経、「芳崖と西洋顔料」『狩野芳崖 悲母観音への軌跡』展図録、東京芸術大学大学美術館、2008、pp.106-111
- ②荒井経、「横山大観と近代日本画の材料」『横山大観画集』、朝日新聞出版、2009、pp.186-191

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒井 経 (ARAI KEI)
 東京芸術大学・大学院美術研究科・准教授
 研究者番号：61361739

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号：